

# 後生可畏

鈴木 徹 元教授 追悼集



故 鈴木 徹 元教授

## 鈴木 徹 元教授 略歴

生年月日 昭和8年4月1日生れ

昭和26年 岐阜県立岐阜高等学校卒業

昭和32年 京都大学医学部卒業

昭和33年 実施修練をへて京都大学医学部外科学教室入局

昭和41年 京都大学医学部外科学第1講座 助手

昭和51年 京都大学医学部外科学第1講座 講師

昭和56年 京都大学医学部外科学第1講座 助教授

昭和62年 山口大学医学部外科学第2講座 教授

平成02年 山口大学医学部附属病院手術部 部長兼任

平成08年 山口大学定年退官



## 鈴木 徹 元教授 追悼集 「後生可畏」 作成に向けて

このたび、平成27年09月07日にご逝去されました、第4代山口大学第2外科学講座教授の「鈴木 徹先生の追悼集(後生可畏)」を企画いたしました。同門会誌の発刊が、5年ごとでもあり、次回の青山会誌発刊時にこの追悼集を行うのは少し時期を失する可能性があるとの思いと、個人的には、着任後の教室運営が一段落ついた時点で、京都の鈴木元教授の下にご挨拶にお伺いするつもりであったこともあり、水田同門会長と岡学長に相談し、関係の先生方からご寄稿をいただくことにいたしました。

日常診療などでご多忙のところ、23人の先生方からご寄稿いただき、追悼集を作成することができました。

なお、本追悼集は、先述いたしましたように、次回青山会誌発刊時に特集として掲載するつもりですが、それまでは、「鈴木 徹 元教授 追悼集(後生可畏)」として、山口大学消化器・腫瘍外科学HP内にPDFとして閲覧できるようにいたしました。是非ご一読いただきたいと思います。

最後に、本教室と同門会の礎を築き上げられた、鈴木 徹先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

合掌

平成28年 9月 13日  
山口大学消化器・腫瘍外科学  
教授 永野浩昭



## 「鈴木徹先生のご逝去を悼み」

医療法人社団 聖仁会 田中外科  
前 青山会会長  
田中聖児

昨年末に、奥様からお手紙を頂き、先生が9月に既に亡くなっておられた事を知り、驚きと共に、もう二度とお逢いすることの出来ない淋しさを感じました。

先生が、山口大学医学部第2外科教授にご就任が決まり、それまでの2外科には、はっきりした同門会の規約も、名称も無かったので、先生が着任されるまでに、規約を創ることになり、私が創案を書き、会の名称も、規約も決まりました。(青山会誌1号参照)

先生ご就任の歓迎会の席で、先生は、僕は山口県は始めてで、何も判りませんので宜しくと、言われました。私とは、年齢も近く、診療所も近いので、何時でもおいで下さい。とお話をいたしました。その後、時々突然来られて、色々話をされるようになりました。

先生も私も、あまり酒のいける方ではなかったので、京都に帰られた時は、必ず饅頭をお土産に頂いた。この饅頭がとても美味しくて、その後私も京都に行ったときは、必ずお土産に買って帰ったものだ。いつ頃だったか寄ってみると、高瀬川の近くにあったその老舗店が無くなっていたのだ。先生との思い出がもう一つ、消えた気がする。

先生が2外科に来られて、留学する人も増え、教室の雰囲気もずいぶん変わって良くなった。

毎年末に、先生と奥様と私達夫婦は、お食事会を一緒にしていたのだが、そんなある時、先生が僕は退官したら、宇部を離れる積もりだ、あとの者が遣り難いだろうし、脚をひっぱってもいけないからと云われた。そんな事はありません、宇部にぜひ残して下さい、と申しあげた。また退官前の或る時、僕は退官したら、家で音楽を聴きながら、ゆっくり本が読みたい、といわれると、すかさず奥様が、猛然と、それは私が困ります。と言われ、先生が、僕は洗濯物も干すし、何でもするよ、と言われた時には、思わず笑ってしまった。その後、宇部興産中央病院長にご就任になりました。しばらくして、ロータリークラブへの入会を、お誘いしましたら、奥様のお父様が、ロータリアンだったそうで、すんなりと宇部西ロータリークラブに入会して頂きました。其の後、1997年より2001年までの4年間、毎週火曜の例会で、お会いするようになり、暮れの家族会では楽しく過ごしました。

最後にお会いしたのは、日本消化器外科学会の会場でした。また何時か、京都でお目にかかれると思っていましたが、叶わぬ事になりました。もう一度お逢いしたかった。残念です。心より、ご冥福をお祈り申し上げます。



## 「鈴木 徹先生の思い出」

東亜大学 副学長  
福岡徳洲会病院 外科顧問  
村上卓夫

私は鈴木先生が山口大学に赴任されてから約5年間山口大学第二外科(現腫瘍外科学)で一緒にさせていただきました。

その間での先生との思い出を振り返ってみることにします。鈴木先生との出会いは、前教授石上先生の後任として京都大学から赴任されて、第二外科教室でご挨拶をしたのが最初でありました。

先生と一緒に各診療科および基礎学科の教授に新任の挨拶回りをしたのが最初の仕事でした。

その後、先生のお住いの官舎にお招きいただき、お茶をいただきながら、まず私が第二外科の現状を話し、その後先生ご自身が考えられている教室の運営方針などを伺ったのが思い出されます。

先生の専門は膵臓外科関連で、それに対して私は石上先生からの流れを継いだ食道外科であり、全く異なっていたので食道外科領域に関しては全面的に私に任せていただいて手術なども自由にさせていただきました。

食道がん症例は石上先生が精力的に行っておられたので、患者さんは多く、色々な種類の食道外科症例に携わらせていただきました。

特に食道がんの再建術式に関しては、石上先生の時代には全例胸壁前経路でしたが、それまで全く行われなかった胸骨後経路および後縦隔経路を全症例行ってきました。

それらの術後成績もそれなりに維持できたのも、先生から責任をもって任せていただいたお陰と感謝しています。

当時の大学での経験を基礎に、今も福岡の総合病院外科の顧問として食道外科に携わらせていただいています。

また先生の技量の大きさを感じさせていただいたのは、先生宛への膵臓関連の原稿依頼を、将来論文数のためにも、また膵臓疾患にも多少は関わるようにとの計らいで、数編の論文を書かせていただいたことです。

国際学会では、アイルランドでのヨーロッパ胸部疾患学会に演題を提出したところ採用されたので、急遽学会出張をお願いしたところ、がんばってくるようにと快く了承していただきました。

またアメリカで当時シカゴ大学からニューヨークコーネル大学に移られたD. スキナー教授(以前私がアメリカ留学した時のボスの一人)主催の研究会に招待された時、鈴木先生にこれまた出張をお願いした時も、快く承諾を頂きました。

この時医局の先生と一緒に行くように旅行日程を組んでいたのが、出発直前になって、3人同時に抜けるのはどうしても困るとの話しをいただき、急遽1人キャンセルして、結局2人で行くことにしたのも今となっては懐かしい思い出となっています。

先生のもう一つ印象に残る思い出は、医局での飲み会するとき、ある店でのバックグラウンドミュージックをお聞きなり、この歌は、ベドロアンドカプリシャスのボーカルの高橋真利子の歌で、「彼女の歌のうまさは半端ではないよな!!」とさりげなく言われたのには私にとっては意外で、学問以外に芸能関連についても、熱く話されていたのに親しみを感じたのを思い出されます。

平成5年に、私が岩国の新設の病院に赴任することになり、外科スタッフをお願いしたとき、私の意向を入れていただき教室員4人を快く一緒に送り出させていただきました。

当時のスタッフが今も私の後任として院長および副院長として頑張っておられます。

私自身は石上前教授、鈴木前教授二代にわたり、山口大学第二外科でお世話になりましたので、あちらでは私のことを良きにつけ悪きにつけ(もちろん悪きことばかりだとは思いますが)お話になられておられることでしょう。特に鈴木先生には色々失礼な言動なり行動なりでご迷惑をおかけしたこと、大変申し訳なく思い、一度お会いしてお詫びする機会があればと思っておりました。

京都にお住まいになってからは、お健やかに悠々自適な生活をされておられるものと思っておりましたのに、昨年の喪中欠礼のご挨拶で先生のご逝去を知り、吃驚いたしましたと同時にもうその意はかなわないとの思いでいっぱいです。

心よりご冥福をお祈りいたします。

安らかにお眠りください。



教授 手術



助教授 手術





## 「鈴木徹先生を偲んで」

小野田赤十字病院  
外科 病院長  
青山会会長  
水田英司

この度、鈴木徹先生の突然のご逝去の報を受けて驚くとともに、先生と接した数年間の思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡りました。

思い起こせば、先生とのお付き合いは山口大学に赴任された昭和62年から始まり、私が大学を離れる平成2年までの3年間は教授と助教授の関係であり、その後先生が平成8年に退官されるまでの6年間は大学と関連病院外科部長としての関係でした。そして先生が平成8年に退官後、宇部興産中央病院の院長として赴任されたのと同時期に私も小野田赤十字病院の院長に赴任し、これ以降は平成21年まで同じ新任院長同士としてお付き合いさせて頂きました。

先生が第二外科に赴任されて印象深かったのは、まず教室員一人ひとりをじっくり観察されることから始められたことです。とくに当時の指導医クラスの腕前が如何なるものかを手術台の横に立たれて見ておられたように記憶しています。私もまだまだ若造でしたから、「第二外科の力量をしっかり見てもらおう」との意気込みで主治医のS先生と一緒に、かなり力を入れて手術を進めたことを未だに覚えています。そして私が感銘をうけたことのひとつに、鈴木先生は医局員の言うことにしっかり耳を傾けて聞き、その後適切にアドバイスをされる方でした。また人事に関しても、あまりゴリ押しはせず一応医局員の要望を加味して考えてくださる方でした。じつは私も、年齢的にそろそろ学外で手術を含めて診療の腕を試したいと思っていた

矢先に、某市立病院への移動を勧められました。すでに心に決めた病院があったのでお断りしたところ快く承諾して頂き有難く思いました。

平成2年に小郡第一総合病院に外科部長として赴任してからは、派遣されて来る教室員についても色々と注文をつけたにもかかわらず、スピーディーに解決して頂いたことにはっきりと覚えています。その後私も副院長として悶々とした日々を送っていたのですが、とあるきっかけで小野田赤十字病院の院長の空席が出来たため、院長に推挙して頂き現在の職についている次第です。

院長となった平成8年以降は、近くでありながらゆっくりお話しする機会がなかなかありませんでしたが、お互いに日本病院会の山口県代議員として年に2回、東京でお会いすることがありました。席は隣り同士でしたので、お互いの病院の色々な取り組みについて意見交換し、先生の慎重な上に、かつ精細なお考えをお聞きして感服したことを良く覚えています。

先生が京都に帰られて後は疎遠となりましたが、訃報をお聞きして、ああ、もう少しお話を聞いておけばよかったと悔やまれてなりません。

最後になりますが、鈴木先生、どうぞ安らかにお眠り下さい。そして山口大学第二外科の益々の発展を見守ってくださいますようお願いいたします。 合掌



## 「鈴木 徹先生を偲んで」

山口大学長  
岡 正朗

鈴木 徹先生は昨年9月7日に急逝されました。私が知ったのは、年賀欠礼の葉書を11月末に頂いた時でした。奥様にお目にかかりお話を聞きましたが、主人の迷惑をかけるまいととの意向を尊重されたとのことで、鈴木先生らしいと、弟子として納得いたしました。

先生は、昭和62年に京都大学より教授として着任され、約10年間教育・研究・診療に飽くなき情熱を注がれました。教室員の特性を的確に把握され、食道班、大腸班、肝臓班、胆膵班、免疫班に振り分けられた教室員は、切磋琢磨してそれぞれの分野で大きく飛躍し、いくつかの第二外科法式が誕生いたしました。常に、既成の概念を越えた、新しい治療および研究を教室員に問いかけられていたのが新鮮でした。週2回、朝7時30分からのカンファレンスが最も教授の質問攻めにさらされる場であり、常に「なぜそう診断するのか?」、「なぜその手術を選ぶのか?」、さらには「なぜ合併症がおこったか?その病態をどう解釈するのか?」など矢継ぎ早な質問が飛んできます。これこそ、新しい診断、手術の発想を引き出し、研究のヒントが浮かぶ瞬間でもあります。特に、『世界に問え』と言われ、「英文でないと誰も読んでくれない」との至極当たり前の号令で、英語論文が次第に増え、多くの教室員が一流雑誌に採用されるようになったことは特筆すべきことです。世界が近くなったのです。アカデミアの旗のもと、教室員

一丸となって消化器外科および乳腺甲状腺外科を診療・研究し、成長していく様は、中においてこそ経験できるわくわくする時代であり、鈴木先生も至福感を味わえたと後述されています。最終講義では、『後生可畏』を残され、颯爽と退官されました。ご退官の折に先生に書いていただいた「熟慮断行」の色紙は、20年後の今も私への戒めとして部屋に置き、心のよりどころとしています。

退官され、宇部興産中央病院の院長として6年間赴任されました。私に気を使っていたが、よほど用がない限り、私の部屋には立ち寄られることもなく、ひたすら病院経営に取り組んでおられました。京都のご自宅は京都国際会議場の近くであり、教室員がしばしば訪れていました。私が訪問すると、相変わらず矢継ぎ早の質問で、心配していただいているのが良く分かりました。

私が山口大学の学長に選出され、教授退任・学長就任祝賀会の折には温かいお言葉を頂きましたが、なんとなく元気がないのが気になりました。その後多忙に託け、先生にお目にかかることを疎かにしておりました。もう少し私を見て欲しかったと、残念でたまりません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 「鈴木 徹先生との思い出」

岩国市医療センター医師会病院  
外科 病院長  
内山哲史

鈴木先生と最初にお会いしたのは、先生が教授として着任され医局に来られた時とと思っていましたが、これは後で聞いた話ですが、実は先生が私を見られたのはこれが初めてではなく、教授に決まり着任される直前に東京であった第30回日本消化器外科学会総会の「術後膵液瘻の治療対策」というワークショップで私が初めてワークショップで発表した際に会場に来られていました。「ディスカッションの時先生は何も発言しなかったな。」と言われました。その後シンポジウム等では発言しなくてはと準備するよう心がけるようになりました。着任後すぐに慢性腹水についての論文を書くようにいわれました。聞いたことのない病態でしたが、一緒に学んでいた入局したばかりの山本達人先生と図書館に通い、日本での症例報告を集め論文を作成しました。この時鈴木先生に論文の書き方についての初めての御指導を受けました。この内容は第48回日本消化器病学会中国四国支部例会の「慢性膵炎の診断と治療」という合同シンポジウムで発表することになりましたが、もう演題登録の締め切りは過ぎているが自分が座長だから発表に加えるから発表しなさいと言われました。又、第53回日本臨床外科医学会のシンポジウム「骨盤内臓器全摘術の適応と限界」をまとめた綜説を書くようにいわれ、完成した後著者をどのようにしましょうかと尋ねると、「先生を筆頭著者としなさい。学会誌の編集部が教授

である鈴木先生の名前にしてもらえないかといってきたが、それなら論文は提出しないとっておいたから先生の名前で出しなさい。」と言われました。これらは一見強引なように思いましたが、先生の豊富な学会活動経験からのことであり、なによりも教室員のことを思っていることだということはずぐにわかりました。医局の海水浴で萩に行った際先生に萩の案内をしました。東光寺、笠山等を案内した後萩城跡に行きましたが、その時「これは日活ロマンポルノの映画のようだな、看板は凄いが中に入ってみると大した事ないぞ。」と言われました。例はあまりよくありませんが、先生はこのようにユーモラスな発言を度々されましたが、その中に本質を捉え分かり易く伝えておられることが、以後に御聴きした多くの話からもわかりました。先生は臨床においては患者をsuper professorと考えて教授より患者を優先しろと教えられました。病棟医長をしていた際患者のことで何度となく突然教授室に行きましたが、その度にお忙しいにもかかわらずすぐに話を聴いて下さいました。このことを思い出して、患者中心はその後もしっかり意識して取り組むようにしています。先生には大変大きな御恩をいただきました。ありがとうございました。



## 「鈴木 徹先生との思い出」

美祢市立病院  
外科 病院長  
本間喜一

平成28年年末に、鈴木先生の奥様から葉書が届き、平成28年9月7日に鈴木先生が亡くなられたことを知り、大変驚きました。他の同門会員に話を聞いても、同様でした。皆さん、「鈴木先生らしいな」と感想をもらっていました。どこが鈴木先生らしいかは、鈴木先生と一緒に仕事をした仲間には、説明しなくてもわかると思います。

私は、鈴木先生に命ぜられ平成2年4月より新設の美祢市立病院に赴任し、以後26年間ずっと勤務しています。定年まであと2年となりました。ちょうど鈴木先生が山口大学第二外科を定年退官された年齢と同じになりました。年だけは同じになりましたが、鈴木先生の業績の偉大さ、尊敬すべき人格には足元にも及ばないとつくづく考えています。いたずらに、年齢を重ねてきただけではないかと自己嫌悪に陥っています。

さて、鈴木先生は昭和62年に京都大学から、山口大学第二外科教授として赴任されました。最初の印象は、優しいような、老けた先生が来たなという感じでした。昭和63年から、病棟医長に任命されました。当時は医局長というポストがなく、病棟医長が何となく医局長を兼ねた存在でした。以後、2～3週間ごとに、夕方になると教授室に呼ばれ、長いときは4、5時間医局の話を中心に、色々な話をしました。鈴木先生は非常に聞き上手な先生で、一度も怒られることなく冷静に話を聞いておられたことが強く

印象に残っています。まだ30代後半の私は深く考えることなく、言いたい放題にしゃべったのではないかと考え強く反省しています。しかし若い医師に、自由に、遮ることなく話を聞かれたことは、なかなかできることではないと、年齢を重ねた現在では、強く思っています。鈴木先生との話し合いの中で、「第2外科関連病院病院長・部長会」を行いたいので準備するように、強く言われました。昭和63年1月に第1回を行い、以後現在まで約30年間続き、しっかり定着してしています。関連病院の院長先生方からは、二外科以外ではこのような会はないので、大変有意義な会であると、好評をいただいております。

平成1年6月よりアメリカ留学のご許可いただきましたので、2年間の約束で勇躍してアメリカに行きました。しかし、アメリカでの生活と研究が落ち着き始めた12月に、「美祢市が新設の病院をつくるので、外科の責任者としていつてくれないか」という電話がありました。一度は断りましたが、二度目は、鈴木先生が、そこまで言われるのならと、考え現在の病院に赴任しました。以後26年間ずっと勤務しています。

直接一緒に働いた期間は短いのですが、私の人生の後半を決めていただいた鈴木先生が亡くなられ、非常に寂しく感じています。ご冥福をお祈りしています。



## 「鈴木徹先生を偲んで」

宇部興産中央病院  
外科 副院長  
福田進太郎

鈴木先生は渡邊浩策先生の後任として1996年6月1日宇部興産中央病院第3代院長に着任されました。初代五十川先生、渡邊先生に次いで3代続けての京都(帝国)大学医学部卒の院長でした。以来2001年5月31日まで5年間にわたって当院の発展に尽くして頂きました。

先生が山口大学第二外科教授に着任されてからの9年間、過去に比べて一段と教室の各分野での発表のレベルの高くなったことに院外から見ている教室員の一人として感服していました。大学から派遣されてきたスタッフの話からも1例の症例から得られる知見に対する洞察の深さが伺われ、先生のまかれた種が苗木となり、それらを後任の岡正朗教授が立派な成木に育て上げられたのだろうと思っています。

先生は、着任以来コ・メディカルスタッフはもちろん給食、清掃等の外部委嘱スタッフにも分け隔て無く優しい笑顔で挨拶をされ、腰の低い態度も重なって短期間のうちに職員全員の信頼を集められました。当時の宇部興産中央病院は経営面では赤字が続き、先生は経営改善のためにも「とにかく良い人材を送って欲しい」と着任後の各学講座への挨拶回りで何度もお願いして回ったと述べておられました。

しかしそんな苦労はおくびにも出さず院長業務の傍ら週1日の乳癌検診、院長回診、外科カンファレンスへの出席を現場への接点として楽しみにしておられました。乳癌検診では病変を見逃してはいけないとの責任感からか、一人の検診に20～30分かけて触診されることもよくあり、途中で打ち切るようお願いするわけにもいかず、検診スタッフと患者が顔を見合わせながら検診終了を待っていたという微笑ましいエピソードもあります。

院長回診では全病棟の詰所を回られ看護部門との連携をととても大事にされていました。当院7階にある個室病棟では全病室を回られ患者の皆さんが恐縮・感謝されることしきりでした。

また外科カンファレンスに来られると術前、術後のプレゼンテーションを熱心に聞かれ進行癌で非切除に終わらないための予定術式を熱心に提案してくださり、インオペの嫌いな外科医魂をお持ちなんだな、と感じることが多々ありました。特に専門領域の膵臓癌の手術では手術室まで足を運ばれて手術を見学され、R0手術ができたときは非常に嬉しそうな笑顔で「良かったですね！」を連発していました。あるケースで、大手企業の営業部長をつとめていた方が糖尿病のコントロール不良から精査を受けて膵体部癌が発見されました。部位的に微妙な場所で膵頭部切除か体尾部切除か意見が分かれるところでしたが、術前カンファレンスで膵頭部を少量残す拡大体尾部切除を提案して頂き、手術を行い鈴木先生も手術の大半を見守られました。術後経過は合併症なく良好で短期間で退院できましたが、術後の病理組織診断で断端から3mmまでの部位に癌細胞浸潤が見られ、カンファレンスで「病理組織学的には断端陽性で、再発の可能性が高いと思います。」と発言した私に向かって先生は珍しく大きな声で「いや、あの手術は完璧にとれています。絶対に大丈夫ですよ。」と言われました。その患者さんは術後20年目を迎え、80才になった今もゴルフをされるほど健在で、外来でその方を診察する度に先生の声を思い出します。

その他私の記憶に強く残っているエピソードをいくつか列挙します。

①着任後しばらくした医局会の最中、隣に座っていると後任の第二外科教授に選出されると岡正朗先生(現山口大学学長)から電話が入り、小声で「良かったな、本当に良かった」と心から喜んでおられたこと

②当直室で夜間頻回に入る救急隊からの連絡後到着までの目安などのために当直室に壁掛け時計を取り付けて欲しいという事務方への私のお願いに、すぐ当直室を見に来られ「俺はいらないと思うんだがなあ」と言いながらすぐに取り付けて頂いたこと。先生、あの時計は今も当直室で時を刻んでくれ、当直医の役にたっています。

③腹腔鏡下ヘルニア修復術が本邦で報告され始めた頃、メッシュの至適サイズはどれくらいですかと質問され、すぐに答えられなかったときに「先生は評議員なのに今月号の学会誌をまだ読んでいないのですか？」とびっくりされたこと。

④日本外科学会や日本消化器外科学会の学術総会抄録が今のCD-ROM化される以前、非常に小さい活字で分厚い抄録集が送られてきている頃の話。抄録集郵送到着後2、3日目のカンファレンスで胆膵外科分野の抄録を全て読んでおられて目についた発表の要旨を嬉々として話される様子を、1頁もめくっていない子分どもは、衰えを知らぬ学究への情熱に口をあんぐりの体たらくでした。

⑤先生が京都大学で研鑽を積んでいる頃の雰囲気を知った時の話です。「あの頃は俊才が他大学からも押し寄せ、寸暇を惜しんで切磋琢磨する梁山泊のようだった。才能の無い私は努力するしか無いと一生懸命がんばったけれどとてもかなわないと思わせるような奴もいた。真面目な方の私でも1ヶ月に1回くらいはメッチェンの話に興じることがあったが、小澤(後の京大教授)や水本(後の三重大教授)などはその時間さえも惜しいと実験・論文の作成をしていた。彼らの凄さを山大の教員に体験させたいものだ」と、遠くを見る目で話されていました。

中央病院の院長の任期延長を会社がお願いした際には「これからは苦勞をかけた女房に恩返しをしたい。ゆっくりと世界一週旅行にでも連れて行ってやりたい」と固辞されました。京都岩倉のお宅には数多くの弟子が伺ったと聞いています。最後まで学究の徒として後輩に尊敬され続けた先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。





## 「鈴木 徹 元教授の遺訓に想う」

独立行政法人 地域医療機能推進機構  
徳山中央病院 外科 部長  
清水良一

・『患者さんはスーパープロフェッサー』:

昭和62年に第4代目の山口大学第二外科教授として着任された鈴木 徹先生が教室主催の最初の歓迎会で語られた名言である。患者さんに優る師はないとの教えを端的に表現されたフレーズで、以後、第二外科の普遍的な理念として教室員の胸に深く刻まれる一節となっている。実臨床において、どのような些細な疑問点でも向上心を持って探求すれば、診断法、周術期管理、手術々式、切除標本の分析、術後補助療法など様々な切り口で、医療の進歩に裨益する新知見が得られることに気づかされた。その結果、教室から発表される論文の数は年を経るごとに飛躍的に増え、遂には臨床応用に繋がる数多くの研究論文が世界に向けて発信されるに至ったことは衆目の認めるところである。

ここで見逃してはならないのは、鈴木先生の論文校正に懸けられた情熱であろう。実際、どのような拙文であっても、一夜の内に校正が済まされ、論点の絞られた説得力のある論文へと仕上がって戻ってきた。常日頃、「教室員の論文校正に費やすためなら、たとえ寝る暇がなくなってもいい」と語られていたことが思い出される。きっと、論文を校正する時間は、鈴木先生にとっても至福の時であったに違いない。

・『後生可畏(後生畏るべし)』:

鈴木先生は業績集の中で「人生は邂逅である」と述べられている。あらゆる「出会い」を非常に大切にされた。所用でお住まいを訪ねたときなど、いつも和服姿で迎えていただき、会話が始めると「これはすごいことだぜー」、「それはどういふことや」といったフレーズを頻繁に口にされ、まるで友人に語り・問い掛けるような口調で、後輩とのディスカッションを心ゆくまで楽しんでおられた。鈴木先生の脳裏には若い教室員達の潜在能力と将来像が鮮明に映し出されていたのであろう。師としてのあるべき理想の姿がそこにはあった。

平成27年の秋に享年82でご他界されたことを知ったのは、その年の暮れも押し迫ってからのことであった。突然の訃報に言葉を失った。教室員一人一人にとって、鈴木先生との出会いが人生の転機となったことは疑いの余地がなく、今は只々畏敬の念を持ってご冥福をお祈りするばかりである。どうぞ安らかにお眠りください。そして、これからも教室の行く末をお見守り下さい。



## 「木目込み人形」

じょうのクリニック  
城野憲史

私の妻は、石上教授最後の秘書でしたが、先生退官後も研究室で勤務しておりました。鈴木教授が赴任された時、早く二外科に慣れたいとおっしゃられたそうで、当時研修医だった山本達人先生の車で宇部市内の同門先生の挨拶まわりをしたそうです。その時、私は入局7年目でしたが、幸運にも乳腺甲状腺の内分泌班のチーフになりました。診断、治療とほとんど諸先輩先生に教わりながらの出発でした。少し手術に慣れてからライターを任せていただくようになり、後輩の先生と共に手術をすることができ、主治医で執刀する食道とはまた違う経験ができました。中国四国乳腺の班会議などにも行き、他大学の先生とも交流し、何となくですが自立心ができたように思います。その後の病院部長そして開業のトレーニングをしていただいたと思っています。当時、医局員がそれぞれの分野について英語の論文を紹介するといったことがありました。鈴木教授は、膵臓以外の分野も熱心に耳を傾かれ、その医学に対する情熱と真摯な態度にいつも敬服しておりました。一度私が、同僚先生の発表の際、中途半端な知識で質問をした時に、普段穏やかな鈴木教授から不勉強を厳しく注意されたことがあります。論理的に深く学問をすることを先生に教えていただきました。ありがとうございます。

その頃は結婚ラッシュで多くの医局員が、鈴木教授ご夫妻にお仲人していただいています。私もそのひとりで、新婚旅行で冬季オリンピックが開催されていたカルガリーに行きましたが、旅行後におたふくかぜを発症し、多くの医局員、看護師さんが次から次に患し、鈴木教授と皆様に随分とご迷惑をおかけしました。遅くなりましたが、謹んでお詫び申し上げます。結婚の記念にと奥様に、木目込み人形をいただきました。この大事な人形の姿を写真に撮ってお見せしたいのですが、今回はできません。なぜなら少しずつですが毎年人形の髪の毛が伸びています。よく見ると頭の真ん中のちょんまげも形が変わっていて、写真にすると少しあやしい感じがします。画像添付を控えることにしました。ただ私たち夫婦としては、かけがえのない愛しい人形です。鈴木先生と奥様にいただいた良き御縁と共に末永く大切にしたいと思っています。

# 「鈴木 徹教授のご薫陶 『後生畏るべし』」

徳島大学大学院  
胸部・内分泌・腫瘍外科 教授  
丹黒 章

2015年11月10日に届いた喪中欠礼で、はじめて恩師鈴木徹先生の訃報を知りました。すぐにお電話をさしあげ、奥様に詳細を確認したところ、昨春、病が見つかり、闘病されていたところ病状悪化し、平成27年9月7日ご逝去されたとのことでした。享年82歳、ついこの前までお元気な姿を拝見していたのに。鈴木先生は盆・暮れの挨拶返礼、年賀状も自筆されていたのに、今年の夏のそれは奥様が代筆されていました。ご遺志により通夜、葬儀は身内のみで行い、皆にはすぐに知らせないようにとのお心遣いであつたらしいのですが、最後の最後までご自身のダンディズムを貫かれたのでした。しかし、ご闘病に気付いてご一報差し上げればよかったと、自分の鈍感さが悔やまれてなりません。

鈴木先生は昭和62年、京都大学第一外科助教授から山口大学第二外科第4代教授として赴任されました。先生が赴任されたとき、私は学位を頂いて助手になったばかりで、教授はどんな方だろうと不安と期待をもってお迎えしました。

鈴木先生が赴任直後に着手されたことは、教室員一人一人を教授室に招かれ、今までしてきたこと、これからの抱負などの聞き取りでした。私は食道外科医を目指しており、これからも食道の臨床と研究がしたいということをお述べたような気がします。先生は、われわれ教室員の個性を尊重しつつ、現状からの脱皮を促されたと思います。学会発表の際も、自信を持って書いた抄録の予稿は、完膚なきまで徹底的に“真っ黒に”修正されました。疑問点があると、すぐに教授室に呼ばれて、「どうしてこうなる、何でや？」と質せられ、それに応えるべく随分と勉強し、自分でも毎日見違えるように成長していったように思います。成長するとともに先生宛の依頼原稿も任されるようになり、書き上げた原稿もほとんど修正していただいたにも

かかわらず、ファースト・オーサーとして一流誌や教科書に掲載される栄誉をいただき、学会でも、ワークショップ、パネルディスカッション、シンポジウムと一段一段上を目指すようになり、あやふやな不安が徐々に自信へと変化するとともに自分の血となり、肉となって自信と実力がついていくことを自覚できました。また、脾臓の手術もさせていただけるようになり、手術のレパトリーを広げることができただけでなく、術前画像診断、とくに鈴木先生が心血を注いで切磋琢磨されてこられた血管造影やCTによる癌の広がり診断に関して多くを学ぶことができ、後のCTリンパ管造影(CTLG)の開発、リンパ節転移の診断に生かすことができました。術前術後の病態生理にも興味が湧き、消化吸収と消化管ホルモンの勉強が面白く、自分でも新しい知見を発見したいと思うようになりました。消化管ホルモンのアッセイを勉強してくるよう指令を受け、京都大学第一外科の研究室にしばらくご厄介になりました。その縁で、米国Little Rockのアーカンソー大学に留学する機会を得て、CCKのラジオイムノアッセイで有名なRayford教授の生理学研究室で2年間の研究生活を送ることができました。多くの友人ができ、英文原著論文も増え、鈴木先生のおかげで今まで想像もしていなかった充実した時間を過ごすことができました。

帰国してからはすぐに病棟医長を仰せつかりました。病棟医長は病棟業務すべてにかかわる権限を教授から授かり、「患者はスーパープロフェッサーであり、教授よりも優先すべし」という鈴木先生の意志を全うすべく責任を以て全患者さんの命を預かることを自覚し、急患の対応にも当たりました。病院経営のためにも手術枠が広がり、毎日が手術日となりましたので、手術日程を組むとすぐに、病棟師長と相談して直接患者に電話をかけ入院の調整をしました。お陰様で病棟運営や患者対応を実地で学ぶと

ともに、どのような多発外傷にも対応できるだけの臨床力と度胸をつけさせていただきました。

鈴木先生はオリジナリティーを尊重されました。最終講義では第2外科の歴史を振り返り、「世事、俗臭に背を向けて象牙の塔に引きこもって、ひたすら明日の科学を切り拓かむと挑戦するそのど性骨こそ第2外科学教室の源流でありましょう。この愚直かつ地道な“しきたり”に支えられそして縛られて私は陋劣非才を顧みず、集まってきた志を同じくする若者とともに精進と研鑽を重ねつつ本日を迎えることができました。なまじ世俗に墮するを許さない教室の学風を背負って王道を歩まれますよう、これが座を降り幕を引くに当たっての私の次期5代目への口伝であります。」と述べられています。教室の歩みを顧み、明日の外科の奔流となるであろう低侵襲手術の理念、方式、功罪などを講演され、その中で私の取り組んでいた縦隔鏡下食道切除術も取り上げていただいた。

山口大学では昭和2年から6年まで手術部長を務められ、平成8年に退任されるまで9年間という短い間ではありましたが、実に多くのことを教えていただき、まさしく薫陶を受けたと自覚しております。

退官後は宇部興産中央病院院長を務められました。学問探究の現場から離れられましたが、学究肌の病院長として中央病院でも、学会発表や論文執筆を促されました。ロータリークラブにも入会され、異業種との交流も楽しそうに、鈴木先生にロータリークラブでの卓話を依頼されたことがあります。このころ鈴木先生が私に、徳島大学教授になるのはどうかと聞かれたことがあります。その時にはまさか今の立場になろうとは想像だにしませんでしたが、先生はちゃんと予見されていたのかもしれない。

私は「鈴木徹教授 退官記念業績集」編集委員として、宇部興産中央病院院長室と印刷をお願いした「瞬報社 オフリン印刷」を何度となく往復しました。完成までに1年も費やしたことを申し訳なく思っています。

業績集の「序にかえて」と題する序文にはこう記されています。

人生は邂逅である。さらに故事はいう。先生からは多くを、仲間からはもっと多くを、そして弟子からはさらにもっと多くを学ぶものである、と。かかる思いを抱きながら山口大学での一日一日であった。集まって来た若者とともに、アカデミズムの追及なくしてなんの大学ぞとばかりに未知の部分に探りを入れ、深奥へと挑む至福感を存分に与えて頂き、今は感謝あるのみである。

思念、完成、体臭などをすべて異にする若者たちであったが、それぞれの自由な発想に火をつけ、その燃えぶりをみては、自らもしきりに導かれ活かされ文字通り飽くことを知らなかった。診療研究上の苦悩と愉悦とを共有しつつ、時には目が洗われるような思いがけない展開を目の当たりに心をときめかせ、時にはいつの間にかこんなにも力をつけたそのど迫りに気圧され、そして時にはひたすら拡充を目指した関連施設からの質の高い発表に胸を熱く致し、それだけでも果報者であったと痛み入るばかりである。

肝を据えてかかれば道自ずと開く筈、との若いころからの思い込みは今なお新鮮である。時折の講義を通じての、いずれドでかい仕事を仕出かしそうな、そんな予感と夢を与えてくれた学生たちとの出会いは、私にとってかけがえない天の授かりものであった。お国の大切な教室をお託し頂き、信ずるまま、難ずるままに糸筋の道をお授け賜ったことに、今一度感謝の意を捧げたい。・・・と締められています。

ひとは生まれ、出会い、そして互いに切磋しながら成長します。「後生畏るべし」鈴木先生の言葉を胸に、無限大の可能性を持つ若人に囲まれ、私も充実した日々を過ごしています。医師として伸び盛りの20代後半から40代にかけて鈴木徹教授のご薫陶を受けたことに感謝し、心からご冥福をお祈りいたします。

写真は2005年1月9日、私の徳島大学教授就任祝賀会に駆けつけてくださり、お言葉を賜りました。岡正朗学長、鈴木徹先生、私と家内です。





## 「ついに畏るべき後生たりえず」

にしはらクリニック  
西原謙二

平成3年4月京都の桜はことのほか見事だった。学会が続き一週間あまり桜の咲き誇る京都に滞在した。暇を見かねて鈴木先生が食事に誘って下さった。鴨川沿いの料亭に案内された。「今夜はスッポン食おう」ということだった。鴨川を臨む川床が設えられた部屋には長崎大学の土屋教授や神戸大学斉藤教授など京都大学本庄外科一門のそうそうたる先生方が集結しておられた。やれやれまったく場違いなところに連れてこられたものだと先生を恨みつつ、生き血のスープを口にした。緊張のせいで料理の味は記憶にない。会がお開きになり、先生に連れられ木屋町から高瀬川沿いを歩き、四条大橋を渡り八坂神社の見事なしだれ桜を見た。何度もかばん持ちをさせて頂いた。先生はいつも勉強されており、学会抄録をすみからすみまで目を通しておられる。傍らで私は週刊現代や文春などを読みふけている。ある時「そんなものが面白いか」と言われた。「先生こそ抄録の何が面白いのですか。」と言い返してやりたかったが、無論言うことはできなかった。隣関連の学会では鈴木先生の穏やかなお人柄の親派が多かった。学会発表では絶対にひるむなど発破をかけられた。依頼論文や抄録を書くにあたっては曖昧な表現で逃げをうつつことを許してくれなかった。学問には常に真摯で前向きかつ情熱にあふれておられた。新たな知見にはいつも公平で柔軟だった。

消化器外科は断ったが隣臓学会の学会長は断れなかった。皆に迷惑をかけると気に病んでおられた。謙虚なお人だ。私の次は山口大学からだと言っておられた。慧眼の人である。京都に帰られる折、これからどうされるのですかと問うと、看護学校で教えるかなと返答された。無欲な方だ。私自身はついに畏るべき後生にはなれなかったけれど、教室からは優れた後世がぞくぞくと輩出されていると伝え聞いています。どうかご安心ください。すばらしい恩師にめぐりあえたことが私の人生の最高の慶事でした。鈴木先生ありがとうございました。最後に、鈴木先生、実はあの時京都で先生には内緒でお見合いをしていたんですよ。暇ではなかったんです。お許し下さい。

## 「鈴木 徹先生との思い出」



独立行政法人関門医療センター  
外科 病院長  
林 弘人

今も教授回診で患者さんにやさしく語りかけ温かいまなざしを向けられる先生のお姿が臉に焼き付いております。長身で白衣がお似合いになる凛とした先生の回診、そして回診に先立って行われる妥協を許さない真摯なディスカッションが繰り広げられたカンファレンス、昨日のように懐かしく思い出されます。1症例ごとにすべての症例に先生ご自身のお考え、外科医としてのフィロソフィーを熱く語られていました。

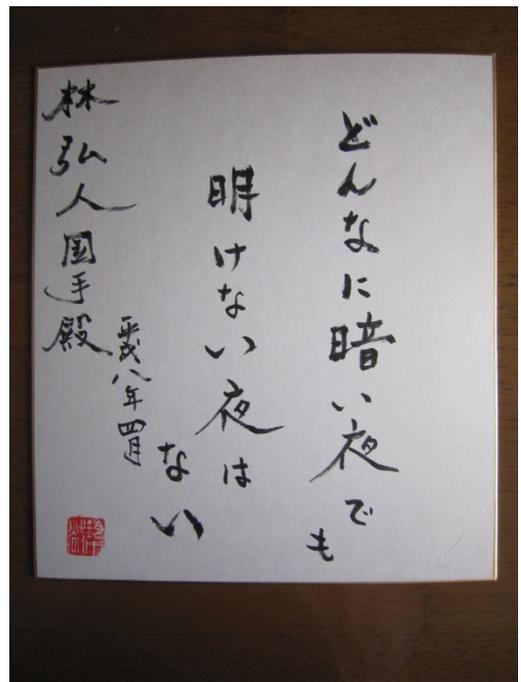
御着任されて間もなく、胸骨縦切拡大胸腺摘出術、右肺上葉・心嚢合併切除をご指導いただき、このとき「引くのも勇気」と仰いました。手術だけではなく、人生のあらゆる場面でこのお言葉を思い起こします。物事を決断する時、「行こう」と決めるのもひとつの勇気です。でも実は引く方が難しい…、何事も、引く勇気を持つ事ができれば行く勇気を持つ事もできます。先生は「引くのも勇気だよ」と仰った時も、笑顔で語りかけてくださいました。

御退官間際の大阪市で開催された消化器外科学会総会、演題採用通知が届いた時、教授室に呼ばれました。ビデオシンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップ2題、ほかにも一般演題が食道関連で採用されました。「よくやった」と仰るかと思えば、開口一番「本当に大丈夫か」とのお言葉でした。お陰様で浮かれることなく、みんなで懸命に発表の準備をし、当日もすべての会場でフロアーから発言したのを覚えております。

「どんなに暗い夜でも明けない夜はない」、先生が御退官のときに戴きました色紙に揮毫されていたお言葉です。いかなる辛いことがあっても必ず夜は明ける、先生のお教を心に刻み、俯くことなく胸を張って歩いていきたいと思えます。

「ぬばたまのその夜の月夜(つくよ)今日(けふ)までに我れは忘れず間(ま)なくし思へば」(万葉集)

学問の師だけでなく、人生の師でもあった鈴木 徹先生、ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



「ありがとうございました。」

岩国市医療センター医師会病院  
外科 副院長  
足立 淳

ありがとうございました。鈴木先生が山口に赴任され、私も9月に徳山中央病院から大学に戻されました。私が浪人中お世話になった下宿のおばさんが、鈴木先生を知っておられ心強く思ったものでした。大学院2年の秋で何がしたいかと聞かれ、動物実験は嫌で、臨床実験をしたい。専門に特化するの嫌で、何でもしたいといったのを覚えています。そして、先生が手掛けておられた消化器と胆道のdual scintigraphyをテーマに頂きました。その後、幾度となく、発表原稿や論文を訂正していただきましたが、見るも無残な赤添削ばかりで、揚句は、名前の順序まで直され、内迫医師や浜崎医師にからかわれたのを懐かしく思い出します。当時は、今のようにコンピューターがなく手書きで、直されると1から書き直し、大変でした。タイプは事務の山崎さんにおんぶにだっこでした。4年終了時には、3月の教授会で博士号の承認を得るのは、逆算をしてこの時が提出のタイムリミットですと脅しに近いお願いを失礼にもしたものです。大変申し訳ありませんでした。大学でご一緒させていただいた時の先生の学問に

対する、恐ろしいまでの情熱と押しの強さに驚愕し、感銘を受けたものです。院が終了し錦中央病院に赴任の命があったとき、ええな～、卒業後7年目で公立病院の外科部長やぞ。僕もなりたかったんやと言われたのを覚えています。また、錦中央病院在任中、腓体尾部癌の手術にお呼びしたところ快く引き受けていただき、学会の帰り宇部空港から直接タクシーで来られ、夜は近くの酒屋さんでマツタケのしゃぶしゃぶパーティで盛り上がりました。麻酔を担当してくれた内迫医師と私がマツタケの入れ係でした。また、浜中先生を介し、嫁さんの心配もしていただきました。いい思い出です。

大学で一緒に働かせていただいたのは、約2年6か月でしたが、本当にお世話になりました。ありがとうございました。いい時代であり、懐かしい思い出でもあり、私の記憶の宝物です。



## 「きわめて私的な、鈴木 徹 先生の思い出」

山口大学医学部  
先端がん治療開発学講座 教授  
碓 彰一

鈴木 徹 先生が教授として赴任されたとき、私は卒後2年目でその事象を深く捉えることはできていませんでしたが、素晴らしい先生がいらっしやっただという感覚が主でした。すぐに大好きになったのだと思います。赴任後初めての医局旅行のとき、鈴木先生を碓と飯塚徳男が車で長門湯本温泉の宿(沈水)までお連れしました。宴会の後、宿にパノラマ映画館？があり大海原を航行する船からの情景がリアルに上映されていたとき、「こんなを見ていると目がまわる、僕は乗り物に弱いんや」と強調されていたにもかかわらず、翌日、他の医局員が海水浴のところを、なぜか我々は鈴木先生を長門観光にお連れしていました。そしてよりもよって、いまだになぜか分かりませんが、青海島観光遊覧船にお誘いしてしまいました。鈴木先生は、「昨日船は苦手やと言ったやろ」と言う雰囲気醸し出しながらも、我々の提案に従って乗船なさいました。天気が良かったわりに波が高く、私もだいぶ気持ちが悪くなりましたが、鈴木先生はさぞかし船酔いでつらい思いをされたことと、後々心の中でお詫び申し上げてきました。しかし小言は一切おっしゃらず、昼食時に「氷でも食おうか」と我々にかき氷を奢って下さいました。おかげさまで船酔いも治まりました。

ご着任時は未だ五十代前半であられたはずですが、今こうして50代になって自分や周りと比較してみると、

やはり別格の初老の紳士、繊細で重厚、温厚で厳格、物静かな立ち居振る舞いや言葉の一つ一つにも重みがあり、「熱を持った堆肥」として第2外科学教室を成長させて下さいました。大学での思い出ですが、胆嚢結石症のことを我々はヒヨレ、ヒヨレ・チスト・リチアースと呼んでいたのですが、その発音を、「cholecystolithiasis(こーるしすたりさいあーしす) です」、と苦々しい表情で正されていたことが鮮明に残っています。また私がカンファレンスで鉄欠乏性貧血のことをアイロンと発音してしまったときには、「アイアンでしょ」と一言苦い表情で仰ったのを未だに忘れることができません。私の場合は、直接ご指導を戴く機会は多くはなかったと思いますが、がん免疫に関する発表原稿を見て戴いた時には、「うーん難しい、よく分からんな、まあ何回も説明してくれ、そしたらだんだん分かってくるから」と遠回しに私の理解とプレゼンが不十分であることをご指導下さいましたし、岡 正朗先生の留学中には重要な事案決定に際して若輩者に声をかけて下さったこともありました。

退官後は学会名誉職などには一切就かれずに、京都のご自宅で悠々自適の生活を送っておられたと伝え聞いています。これからも先生の存在は私たちの心の中にずっと生き続け、先生のご指導はずっと続いていくと確信しています。鈴木 徹 先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。



## 「鈴木先生に想う」

やぎゅうクリニック  
柳生岳志

鈴木先生には医師として、真実を探求していく姿勢をおしえていただきました。肝臓の患者さんに体外肝切除の術式を行うプレゼンテーションを行った時のことです。当時は体外に摘出した肝臓をバックテーブルで右三区画を切除し、人工血管に左肝静脈を再建した後に、肝外側区域を人工血管とともに体内にもどして下大静脈を再建するという術式を行った例が世になく、この術式を西田先生からアドバイスをうけて清水先生とも相談して、カンファレンスで提案した時のことです。鈴木先生は今までに見たことのないような勢いで、矢継ぎ早に質問をされました。一つお答えすると、たちまちに次の質問がかかります。終止、机の上に書かれたノートを見ながら5-6個の質問をされました。未体験の手術(すくなくとも医局員は全員が未体験)の流れを画像とこれまでの経験から創造力を働かせてシュミレーションされる鈴木先生の迫力に圧倒されました。そして、最後の質問は「下大静脈のクランプは横隔膜上か？下か？」というものでした。当時の私にはその場面を想像できず、答えに窮していた時に肝臓班の先輩が「横隔膜の下です。」と声を上げてくださいました。しかし、鈴木先生は納得されない様子で、「下でいいのか？」とつぶやかれました。その場はこの課題をのこしたまま終わりました。

後日、改めて研究室で鈴木先生を中心に肝臓班のメンバーでシュミレーションを再度行うことになりました。その際に鈴木先生は以前よりもより細かい手術のポイントを質問されました。「肝動脈の再建は？」「胆管ステントの形状は？」そして、下大静脈の再建について、「下大静脈のクランプの位置は？」と再度確認されました。事前先輩方と相談して「横隔膜の上」と結論していたこともあり、「横隔膜の上です」とおこたえしましたら、間髪いれず、「そうだ！そうだろ！」と語気を強めていわれました。あたかも経験済みの手術であるかのような迫力でした。不安がぬぐえたご様子でした。あとは一切まかせたように、当日は長時間の手術に終始おつきあいをしていただき、見守っていただきました。師匠のように厳しくもあり、ご主人のようにたくましく包み込んでくださりなんでも相談を聞いていただける存在でもあり、そして父親のような暖かい先生でした。

わたしがであった医師のなかで、最も尊敬する師匠でした。鈴木先生、本当にありがとうございました。ここから御礼を申し上げます。おそらく、今頃はどこかの国で医師の道を歩む第一歩を開始されていることと思います。



## 「好奇心の権化」

山口大学医学部附属病院  
腫瘍センター 准教授  
吉野茂文

雑誌「消化器外科」の巻末に著者のプロフィールが掲載してある。鈴木 徹先生が山口大学に赴任される直前にタイミング良く論文を寄稿されプロフィールを拝見することができた。教室員一同新しく赴任される教授がどのような先生か大変興味あったわけだが、まさに適時であった。その中で御自身を「好奇心の権化」と紹介されていた。先生が赴任され、大学院生であった私は当時研究指導医であった現学長の岡 正朗先生から頂いた、「レンチナンの免疫賦活作用」のテーマで引き続き研究を継続することになったが、それまで全く免疫とは縁のなかった先生から矢継ぎ早に質問を受けた。「止む無く時流についてゆべく、執拗に教を乞うこの知りたがりやの私めに対し、若者達はいやな顔もみせないでじつによく応答してくれた(退官記念業績集より)」。ここまで優秀な応答はできなかったと思うが、従って容易には私の研究のことは理解して頂けなかった。それでもまさしく「好奇心の権化」の先生は「百回でも聞くから同じ質問に答えてくれ」とよく言われ、最後には、「初めて君の言いたいことが理解できたな」と言って頂いた。涙が出るほど嬉しかった。岡 正朗先生が平成13年5月に主宰された癌免疫外科研究会において私がシンポジウムで発表した直後のことである。昭和63年の7月に、先生が赴任されてから初めての医局旅行があった。当時恒例であった萩の菊ヶ浜での海水浴である。上品な先生は海水浴はされずに、早朝海岸沿いを下駄で散策され、その後私が市内観光へお連れした。

看護助手さんと3人で笠山の風穴へ行きサザエの壺焼きを食べた。そこで看護助手さんの「河鹿」の話に大変興味を示された。実に文学的な先生の人情の機微に触れることができた。学問のみならずあらゆる分野で「好奇心の権化」でいらした。私と先生の懐かしい思い出である。

先生が赴任されてから暫く2次会の定番であった「Jazzy」では、「昴」でセンセーショナルなデビューをされた。そこでもよく医局員の他愛もない話に興味を示された。丁度ビール革命の頃でビールの蘊蓄や、あるいは神社仏閣の話に至るまであらゆる雑学に「好奇心の権化」でいらした。しかも名は体を表わすとはよく言ったもので、先生はいつもほがらかなお顔で話を聞かれていた。和服にも「好奇心」をお持ちだったのだろうか。結婚の報告で御自宅を訪れた時は着物姿で迎えて下さり、また披露宴では奥様とお色直しに会場を出ていく家内の後姿を見て、二度と見られないからよく目に焼き付けておけよと諭された。それもこれも先生との思い出である。

最後に先生は慰める天才でもいらした。平成元年にトロントで開催された33rd World Congress of Surgeryで私が質問に答えられずに撃沈した時も、「分からない事が分かっただけでも大したものだ」と慰めて下さった。大変救われた思いがした。

思い出は尽きませんが、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。追悼の言葉とさせていただきます。合掌。



## 「鈴木 徹 先生を偲んで」

山口大学大学院  
消化器腫瘍外科学 講師  
山本 滋

お亡くなりになられたと聞いて誠に残念に思います。先生は私から見れば、常に、遥かに高い所におられ、医局員を笑顔でご覧になっておられた方のような気がします。

先生とお目にかかる機会が出来たのは、医師となって4年目の秋でした。当時、私は山口大学卒業後、すぐに臨床研修病院である東京厚生年金病院外科に勤務し、ひきつづき、国立国際医療センター外科に移り勤務していました。今後どうするかを考え、山口大学に戻って研究し学位を取得したいと考え、東京での学会の折、お忙しい中、時間をとっていただき、昼食をとりながら面談をしていただきました。緊張して、あまり料理の味がわからなかったことを憶えています。面談後、第二外科に入局することをお許しいただきました。

その後、5年目の春より大学院生となり山口に戻りました。先生は、幽門輪温存膵頭十二指腸切除を日本で最初に執刀され、膵臓外科の権威として御活躍されておられましたが、私には胆道再建の各種モデルを犬で作成し、モデル別に肝内での胆管炎の発症の程度と、再建腸管内での胆汁酸の変化を検討し、炎症・消化吸収の面から最適な胆道再建法を見出すテーマを頂き、先生の教えを頂くようになりました。

私が大学院2-3年目の頃、先生はJDDWの膵臓学会の会長として、神戸で学会を開催され、準備、実施、等の指示をされました。当時、私は、他の医局員とともに、先生のご指示を受けて雑用事務を行いました。先生はあまり細かいことは言われず、私達は、自由に楽しく学会を満喫できたことを憶えています。その後、私は、自分が主治医となったERCP施行を契機に膵膿瘍を合併した幽門輪温存膵全摘術の症例報告を、初めて英語論文として投稿することになり、英文を先生に訂正して頂くと共に、大変有益なコメントを頂きました。また、胆道再建に関する学位論文も多大なご指導をいただき、学位を頂くことが出来ました。退官前に、私は人事で川崎医科大学 乳腺・甲状腺外科に赴任することになり、その事で先生にお会いしたときには、これからは乳癌患者は増加するのでしっかり勉強してきなさいと、励ましのお言葉をいただきました。先生は、第二外科の発展に多大の貢献をされましたが、その先生に教えを頂くことが出来たことは、大変幸福であったことと感謝しております。

先生のご冥福を心からお祈りいたします。

合掌



## 「鈴木徹先生との思い出 (小生はなぜ萩にいるのか)」

医誠会 都志見病院  
外科 副院長  
山本達人

H27年9月14日にご逝去されました鈴木徹先生のご冥福をお祈り申し上げます。私は、鈴木先生が教授として赴任された昭和62年に大学院入学と同時に第二外科に入局しました。先生の第一印象は体も頭もスマートで温厚な紳士でした。その印象は一生変わることはありませんでした。当時の二外科では進行胃がんに対する幽門側胃切除後の再建はビルロートII法が多かったと思いますが、カンファで先生の「I法ではだめですか」の質問に対する「局所再発を懸念してII法を選択しました」という返答に、先生は「I法でつないで局所再発したら早く発見できて次の手が打てるのではないか」と返されたのが印象的でした。固定観念にとらわれない柔軟な思考・発想の転換にはっとしたことを記憶しています。「手術は頭でするもの」という先生のことばが外科医としての私の座右の銘になりました。先生から大学院生として与えられたテーマは、膵頭十二指腸切除後の再建を意識した胆道再建のビルロートI法方式とII法方式を生理的に評価するというものでした。膵頭十二指腸切除、胆道再建どころか右も左もわからないノイヘーレンに京都大学の論文をぼんと渡されこの続きをやって下さいと言われた時は困難ないばらの道に迷いこむ自分を自覚しました。先生に「おれはおこっているんだけどなあ」「豚もおだてりゃ木に登るとい

が木のそばまで連れて行っても登らんなあ」とおだやかに諭されたおかげで、できの悪い輩でしたがぎりぎり学位を習得できました。J.A.C.S.に論文が掲載されたことが少しは恩返しになったでしょうか。さて、今日の自分があるのは先生が私を京大外科同期の都志見久令男先生に引き合わせていただいたことに尽きると感謝しております。都志見病院には山口大学からの最初の常勤医として派遣されましたが、京都大学や島根医大の先生方に大変かわいがっていただきました。その環境が忘れられず、再び萩に戻りたいというわがまを聞いていただき今日までできました。先生が京都にもどられた後、何度かご自宅にお邪魔し都志見病院のことをお話させていただいたことが懐かしく感じられます。外科の師匠、先生と都志見先生が鬼門に入られ手術や政治の話ができなくなったのはとても寂しく思います。しかしながら鈴木先生に叩き込まれたリサーチマインドは私の中で今も息づいています。先生から受けた薫陶と都志見病院外科の業績をH27年8月京都大学日本海側関連病院会議の際に紹介させていただきました。最後に、晩年医学から一線を隔し人文学に遊び、俳句を詠まれる先生の姿が印象的でした。鈴木先生有難うございました、ご冥福をお祈り申し上げます。





## 「俱会一処(くえいっしょ)」

川崎医科大学  
消化器外科学 主任教授  
上野富雄

鈴木 徹先生は、私が学部6年生、昭和62年の夏に京都大学から赴任された。当時の医局の先生方から、鈴木徹先生のお人柄と業績をお聞きし、昭和63年春の入門を決意した。したがって、我々の学年は、鈴木 徹門下第一期生、今でいうところの鈴木チルドレンといってもいいのかもしれない。

先生はほんとうに温厚で、先生から声を荒げられた記憶が一度もない。ただ、こと学問に関しては非常に熱く、議論・討論が大好きな先生であった。そこでは先生の莫大な知識の一端が見えることができた。抄録・論文作成では、ほとんど原文がないほど訂正され、抄録では表面に大きく×印のみがついており、裏に先生が直接、鉛筆で全面改正されていたこともあった。このような書き直しを受けた原稿は、現在、手元には1枚も残っていないので、今回、資料としてお見せすることができないのが残念である。当時はワープロもあるにはあったが、先生はいつもしつぽに消しゴムのついた黄色の昔ながらの鉛筆を使っておられたのが、懐かしく思い出される。先生の文体は、いくぶん文語調で、“かかる(このような)”とか“然るに”とか“けだし(考えてみるとまさしく)”“いわんや”などが登場する。一度、なぜこういう単語を織り込むのか尋ねたところ、誰が指導しているのか見る人が見たらわかるので、という意外な答えであった。

大学院では、先生のライフワークであったPPPDにおいて、胃内容排出遅延の原因を探れという大命題をいただいた。研究が進んでいくにつれ、解剖学的な要因が主体であり、先生が理想とされていたビルロートI法方式再建が、まさに胃内容排出遅延を増悪させるという、先生の思惑とは真逆の結果となってしまったが、そのまま公表することが許された。先生の科学に対する謙虚さと真摯な態度を垣間見ることができた。真の研究は、それまで言われていないマイナーなことから始まるため、初めは世間から多くの批判・反論を受けるが、それが徐々に正しいと認められる過程で、気づけばメジャーになっていくものよ、とご自身のPPPDの研究体験を通じて教えていただいた。私にとって、先生はまさに理想の上司であり、恩師であった。これからも鈴木 徹先生のように自由に生きたいと思っている。平成28年1月10日、先生のご遺骨と対面した。不思議と涙は出なかった。先生らしい最後だなあと思った。恐らく先生が悔いのない人生を過ごされたのがひしひしと感じられたから、とも思う。奥様に菩提寺は知恩院(浄土宗)とお聞きし、お浄土で再会できる(俱会一処)よう「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と何度も何度もお唱えした。心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

# 「鈴木 徹先生の思い出と現在も続く感謝」

川崎医科大学  
総合外科学 准教授  
中島一毅

川崎医科大学 総合外科学の中島と申します。私は鈴木先生の第一期生です。

研修医当時の思い出で、強く印象に残っていることをお話したいと存じます。

私は幸いなことに入局1年目の研修医時より鈴木先生に直接ご指導いただける機会が多くありました。最初の学会抄録作成、最初の発表スライドチェックも鈴木先生に見ていただきました。その際の出来事です。

初めて抄録をワープロソフトで作成し、教授室で見てくださいました。ワープロの変換機能により、鈴木先生の「徹」が「敬」になっておりました。私は全く気がついていなかったのですが、最初にそこを指摘され、京都大学の時のお話をされました。

京大で本庄一夫教授に抄録チェックをお願いした先生が、本庄先生のお名前を間違えていたらしく、「上司の名前は間違えるとは何事か」とひどく叱られ、翌日、転勤になったとの話しでした。私は震え上がって、謝罪したことを覚えておりますし、外科の世界の厳しさ、礼儀の重要性

を身にしみて感じました。その後、丁寧にスライドを直していただき、発表の予行演習を見ていただいた後、ポイントを整理する方法や、困ったときのテクニックなどを1時間ほど丁寧に教えていただきました。1年目の研修医にとっては、大変贅沢なご教授を頂いたと思います。

現在、私の仕事は学会発表、大学講義などプレゼンテーションが中心です。今でも準備資料を作成しているときに、このときのことが思い出されます。大学院時代にも鈴木先生には何度も直接ご指導を頂いておりますが、私の現在のプレゼンテーションテクニックは最初にご教授いただいた鈴木先生のご指導がベースになっていることに疑いありません。つまり、私が現在の仕事を続けていられるのは、この時のご指導があったからだということです。本当に感謝しております。

これからも大学は違いますが、教えていただいた技術をさらに進化させながら、後輩たちに伝えていきたいと考えております。大変、お世話になりました。

## 「鈴木徹先生を偲んで」

美祢市立病院  
外科 部長  
田中昭吉

鈴木先生には入局から大学院までの7年間、外科医・研究者として様々のことを教えて頂きました経験させていただきました。

手術で一番記憶に残っているのは、10代の女性の膵体部腫瘍の手術です。術前診断は良性の可能性が高く、術後病理結果も良性腫瘍だった症例でしたので、手術は単純に脾・膵体尾部を脱転して膵体尾部切除を行うものと考えていました。しかし開腹してまず鈴木先生から頂いた指示は、Kocherの授動術でした。なぜKocherからなのか一瞬手が止まりましたが、Kocherの授動術から下大静脈前面の疎性結合織をすべて膵頭十二指腸側後面につけるように剥離し、引き続いて左腎静脈前面に沿って示指を深く挿入して膵尾側組織を剥離するいつもの膵癌で行う膵頭部脱転操作を行ってから、脾膵体尾部を脱転し左右の剥離層を連続させてから膵切離を行ったのでした。腫瘍が悪性だった場合のことやトラブルが起こった時のことを考えて、膵臓の手術はこのようにしなさいと膵臓手術の要点をしっかり教えて頂いた症例でした。

研究面でも、沢山相談に乗っていただきアドバイスを頂きました。私の研究テーマは迷走神経幽門枝が幽門輪温存膵頭十二指腸切除後の胃排出能遅延に關与しているかどうかをアセトアミノフェン法を用いて調べることでした。

そこでまずアセトアミノフェン濃度を測定することから始めましたが、当時2外科研究室には素晴らしいHPLC装置があったものの、過去にこの機械を使用して学位をもらった先輩はおられませんでした。それでも半年くらいかけて何とか測定できるところまでこぎ着けたのですが、1検体を測定するのに非常に多くの時間を要することや同じ検体でも手技による測定誤差が生じることが判明しました。ラットの血液濃度でしたので、微量な測定誤差でも結果にかなり影響することから、悩んだあげく鈴木先生に相談に行ったところ、費用は何かなるから気にしないで業者に測定してもらいなさいと即答頂きました。おかげで本実験のみに集中することができ、先生の教授退官までに大学院を卒業することができましたが、測定料が実は高額であったことを岡先生に言われて初めて知ったのは、先生が退官されて数ヵ月後のことでした。

思い起こせば次から次へと当時のことが鮮明に頭に浮かんでいきますが、真っ先に思い出されたことが先生との一番の思い出だと考え、上記のような拙文となりました。

鈴木先生、今まで多くのことを御教授頂き誠に有り難うございました。心よりご冥福をお祈りいたします。

# 「鈴木徹先生のご逝去にあたって」

宇部興産中央病院  
外科 部長  
平木桜夫

平成27年の10月だったでしょうか、鈴木徹先生の突然の訃報をお聞きしたのは、つい直前の8月にはいつも通りの、一目で直筆と判るお葉書を頂いていたばかりで正に寝耳に水のお知らせでした。

私がまだ学生の時でしたので昭和63年頃のことと思います。たまに朝から学校に行きますと、当時歩いて通勤なさっておられた鈴木先生と真締川の橋あたりでお会いすることが時々ありました。病院までの道すがらいろいろとお話をさせて頂いた記憶があります。入局してからも当時のことはご記憶にあられたようで、新入医局員として大変感激したものでした。研修医時代を含めても大学での勤務が4年数か月と短かった私でしたが、鈴木先生の教授ご退任に先立ち、現職の宇部興産中央病院勤務を命じられ、その半年後より病院長としてご着任になられたことで、その後長きに渡って直接ご指導頂く機会を得られたことは、誠に幸せであったものと改めて思うところであります。

病院長としてご在職中には、私共が臨床で困っていることに対して種々助言を頂いたのは勿論なのですが、重心は病院経営に完全に置かれ、宇部興産本社役員との折衝、行政とのやり取りなどなど大変ご多忙な中、従前とは全く異なる病院長業務を「面白いねー」と、喜々として取り組んでおられたことを懐かしく思い出します。数年間の院長職をお勤めの後、退職なされてからは京都にお戻り

になれましたが、医療、医学からはすっぱりと身を引かれたものとお聞きしています。

京都のご自宅に初めて伺ったのは当院を退職なされてから4-5年経った頃でしょうか。京都国際会館で開催された学会の際に、会場まで自ら歩いて(!)御越しくださり、ご自宅へ案内して頂き、奥様と共に大変歓待して頂きました。第二外科の数人の仲間と共に邪魔させて頂きましたが、とても喜んでくださったことをありありと思い出します。御馳走になったあとは、またご自身で歩いて最寄りの地下鉄駅までお送り頂いたのです。その後も2-3年毎に京都で開かれる学会があると、何人か誘い併せて伺わせて頂きました。その都度ご夫婦でおもてなし下さり、本当に有難うございました。

最後に京都でお会いしたのは平成26年4月の外科学会総会の時期でした。毎回お宅にお邪魔するのは申し訳ないと、京都市内の割烹旅館に招待させて頂いたのです。いつも通り良く食べ、良く飲まれ、良くお話になったものでしたが、さすがにお年を召されたなと感じたことを記憶しております。思うに私は、同門の中でも最も長きに渡って鈴木先生の御交誼に預かった一人ではないでしょうか。長年の御恩に対してこの場を借りて改めて深謝致しますと共に、先生のご冥福を心からお祈り申し上げる次第です。合掌。



# 「鈴木 徹元教授をお偲び申し上げます」

## 独立行政法人関門医療センター 外科 部長 安部俊弘

平成2年に山口大学消化器・腫瘍外科学(旧第2外科)へ入局してから鈴木 徹先生とは毎年、年賀状をやりとりさせていただいていました。先生が京都へ戻られましてからは、毛筆での手書きの年賀状をお送りいただき、毎年、楽しみにしていましたが、平成28年の年賀状は届くことなく、その数か月前に奥様から送られてきました突然の訃報に驚かされました。

鈴木先生との出会いは学生の頃からのはずですが、真面目に講義に出席していなかったため、実は講義の記憶はあまり残っていません。記憶に残っていますのは卒業を前にして進路を考え始め、入局説明会などで、そのお人柄に惹かれ、入局を決心した頃のことからです。

入局後は学会の抄録などを大変ご熱心に校正していただき(当時は今と違って手書きでしたが)、真っ赤になって戻ってきて、わずかに名詞が残っているだけの状態で、これで字数は合うのだろうか?と思ったりしましたが、見事に制限字数と一致し、驚いたものです。この頃に、適切な用語を用い、適切な言葉で、適切な時間でプレゼンテーションするというスタイルをお教えたいただいと、とても

感謝しています。また、当時では山口大学での採用はまだ珍しかった、外科学会のビデオシンポジウムに採択されました際にはとても喜んでいただきましたことも記憶に残っています。

私事では、結婚式の仲人も快くお引き受けいただき、式の前に家内と一緒に食事に誘っていただきました。わたしたちの拙い統一性の無い話をお聞きいただき、結婚式での仲人挨拶で見事にまとめていただいたのも、先生の頭脳明晰さを表す一端として大変記憶に残っています。

晩年にご一緒させていただきましたのは平成22年に岡正朗 前教授が下関で開催されました第65回日本消化器外科学会の際、ならびに平成26年5月の岡正朗 前教授退任・学長就任記念式典だったと記憶しています。特に下関では鈴木先生を招いての内輪の食事会で楽しくお話しさせていただき、お元気そうでしたので、今回の突然の訃報には驚かされました。

小生がまだ若かったころに鈴木 徹先生のご指導を仰げましたことに誇りを感じつつ、謹んで鈴木 徹先生のご遺徳を偲び、追悼の意を表したいと存じます。



**山口大学大学院医学系研究科**  
**消化器・腫瘍外科学**  
**鈴木 徹 元教授 追悼集 「後生可畏」**  
平成28年9月発行

発行 山口大学大学院医学系研究科 消化器・腫瘍外科学

編集責任者 鈴木伸明  
編集委員 徳光幸生

TEL : 0836-22-2264

FAX : 0836-22-2263

ホームページ : <http://www.yamadai-gesurgery.jp/>